

「30周年記念事業」のトップを切って、計17日間の日程で、30の集中連続講座「不登校大学」を開催しました。30年間シュレーが向き合ってきた不登校について、この節目の年に多角的な視点からあらためて見つめ直し、歴史的総括と未来への展望を開こうと企画したものです。保護者、フリースクールや親の会の関係者、学生、経験者、ソーシャルワーカーなどなど、都内近県のみならず遠方からの申込もあり、連続参加34名、部分参加・単発参加を含めると計72名の受講者がこの学びの輪に加わりました。

講師には各界で活躍する13人の方々にご協力いただき、加えてシュレースタッフ奥地・朝倉・中村がそれぞれの専門分野や経験から講師をつとめました。当事者から学ぶ機会として、子ども・若者、OB・OG、保護者などのゲストにもご登場いただいた回もあり、どれも好評でした。

振り返るとあつという間の熱い学び30講座を凝縮してご紹介させていただきます。(藤田岳幸)

※講師名に敬称のないものはシュレースタッフが担当しました。

①不登校大学は何を目指すのか(奥地)

開講に当たり不登校は学問的「定説」がなく、子ども・若者・親から多くを与えられ、専門家・市民とも一緒に学びあってきたことを土台に、参加者といっしょに探求したいという趣旨をお伝えし、受講者のみなさんの参加動機を共有しあいました。

②不登校の歴史(奥地)

不登校の歴史を、問題行動とされ何とか登校をさせようとしてきた苦しみ歴史として、そして「子どもという生命」と「学校という制度」の関係の問題としてとらえ直し、取り組みを進めてきた歴史として概観しました。

③個人史から見る不登校(ゲスト2人+木村)

「不登校」をめぐる、子ども自身が、またその親が、実際にどんな経験をし、どんな対応がなされ、どういった社会状況が影響していたか? 当事者・母親お2人の経験をお伺いし、それぞれ歩まれてきた人生を追体験する時間となりました。

④いじめと不登校(奥地)

シュレーの子どもによる映像作品『不登校なう』を見ていただき、参加者同士のディスカッションによって、いじめの構造、不登校で自殺せずに命が救われる、不登校によって無理な登校によるいじめをしないで済む、といったことを考えあいました。



於・シュレー大学

※29講のみ東京シュレー葛飾中学校

⑤不登校政策の変遷(朝倉)

戦前・戦後の各種資料から不登校の源流を掘り起こし、長欠が貧困から現在の不登校にシフトする流れの中で、行政が毎年統計をとって対応・政策を示し始めた経緯を整理し、それに応じて市民の発信が政策を動かしてきた変遷をたどりました。

⑥人間性教育学の提案(天外何朗さん)

「人間として何が大事か?」をテーマに、ご自身の高校・大学時代の話、脳科学・心理学の見地などから、たとえば勉強しろという指示命令がどうして行動につながらないのか、人間が夢中になり結果を生み出すフローの考え方をうかがいました。

⑦不登校とスクールソーシャルワーク(山下英三郎さん)

人と環境が不適合な部分から問題がうまれるという発想に立ってエンパワメントと環境調整を行うソーシャルワーカーの役割についてや、サポート資源が希薄な子どもにとってサポーターと居場所の重要性についてなどをお話いただきました。

⑧不登校研究はどう行われてきたか(朝倉)

20世紀前半の英米での精神医学研究、それが戦後日本で受容され個人病理の解明・治療対応策として進んできた研究の変遷をたどりました。加えて、社会現象としての不登校について朝倉の専門とする社会学分野における研究が紹介されました。

⑨不登校している子どものくらしと心(内田良子さん)

長く子ども・親と関わり続け、昔と今で子どものつらさは変わっていない、親ができることは子どもの安心できる環境を用意することで、子どもをすぐに学校や仕事に結び付けず「母さん元気で留守がいい」に尽きる、といったお話をいただきました。

⑩不登校と心理学(西村秀明さん)

精神分析・精神医学における研究の流れを概観したあと、不登校から学ぶことの大切さ、平均を基準にすえ、それ以下を問題にする発達心理学の問題点などをお話いただきました。「星のうさぎのおとしもの」のメッセージが心に残りました。

⑪不登校とひきこもり(西村秀明さん)

トラウマ反応の発症はそれ以前の性格に関係ないという被害者学の知見を紹介いただき、豊富な実例エピソードを交えながら、支援の根幹は「自分のありのままを尊重してくれる存在がある」という経験だ、といったお話をしてくださいました。



⑫学校教育と不登校(寺脇研さん)

広島県教委・文科省の中心で教育変革に携わっていた経験や自らの学校時代の経験を交えながら、いつでもどこでもだれでも学べる、学習者の権利から出発する「生涯学習」の大切さ、不登校のもつ意味についてなどについてお話いただきました。

⑬ポスト近代の学校と医療(石川憲彦さん)

人間が生きものから離れていく近代、精神医療と学校教育がどうしてほぼ同時期に誕生したのか? 高度成長から今また曲がり角に来ているのでは? 生命と制度の関係について考える材料を、壮大な歴史的視点からたくさん提供していただきました。

⑭つくられる病(井上芳保さん)

健康不安をあおられる中で、些細な身体の不調が「病気」と診断され、やがて本当に薬で治る病気になっていく。様々な問題が医療の対象にされていく動き。そうした現代の「医療化」の視点から、不登校と医療の問題を置いて、お話しを伺いました。

⑮矯正施設で命を失った子どもたち(奥地)

不登校対象の矯正施設の存在、そしてそこで帰らぬ人となった悲惨な事例は、不登校対応の負の歴史でもあります。痛ましい6つの事例に触れ、何が問題か、なぜこのようなことが起こったのか? 参加者のディスカッションで深めました。

⑯子どもが語る不登校(ゲスト4人+藤田)

フリースクールの3人、ホームシュレーの1人が登場。あらかじめ集めた質問から「嬉しかった・つらかった親の態度・言葉」「辛いときに支えになったことは?」「次のことをやろうと思ったきっかけは?」などについて話してもらいました。

⑰市民活動が支えた不登校(奥地・中村+ゲスト2人)

まず奥地が親の会・フリースクール・メディアづくりなど市民活動が不登校を支えた歴史を講義し、そのあと中村が日本のNPOの枠組みについての整理と、実際にフリネット・不登校新聞社に関わる2人を交えて、実例を紹介しました。

⑱一人一人の学習権を保証するために(鈴木寛さん・寺脇研さん)

それぞれの子ども時代から行政に関わる歩み、文科相・日教組との対立図式から変わった流れ、そして子どもの学習権が十全に保障される社会に向けて必要なことなど、教育行政に深く関わってきたお2人の経験や熱い思いはどれも濃密なお話でした。

⑲親が語る不登校(ゲスト4人+木村)

子どもが不登校になったことから、子ども自身と向き合い、自分自身と向き合い、結果、社会を問い直していた、ということが具体的にわかりました。どの方も子どもさんを尊重し、ご自身を尊重している姿がお話で伝わってきました。

⑳不登校への対応(明橋大二さん)

医師という立場から、不登校はオーバーヒートの状態である。心身ともにへとへとな状態から、回復するまでのプロセスを丁寧にお話してくださいました。HSC(人一倍敏感な子)のお話は、多くの人が関心をもつテーマでした。

㉑不登校と学ぶ権利(多田元さん)

弁護士として、学校へ行く権利を侵害され、行かないことによって差別的な不利益を受けている不登校問題を整理され、様々な国際条約・判例を紹介しながら、子どもの視点から豊かで多様な学びの可能性を広げることの大切さをお話してくださいました。

㉒フリースクール東京シュレーと東京シュレー葛飾中学校の実践(奥地)

30年間大切にしてきた「自由」「自治」「個の尊重」の理念、そして映像を交えて実際の様子を紹介しました。フリースクールから生まれた学校の存在意義と実際の様子、そしてこれからシュレーが目指していることをお話しし、意見交換しました。

㉓ホームエデュケーションについて(奥地+ゲスト3人)

特定の教育機関に通うのではなく、家にいながら、育ち学ぶ子どもたち。その子にあった学び方には、実に多様なあり方があります。シュレーの実践報告に加えて、母親2人からも実際のお子さんとのやりとりや思いをお話しをいただきました。

㉔学校の歴史と不登校(汐見稔幸さん)

寺子屋を昇格せず工場や軍隊のためにつくりなおした日本の学校。そして戦後の管理化が進んでいく経緯。不登校とはこの近代の考えにあわない子どもたちの出現であり、時代の先端を進んでいく可能性のある存在だ、というお話しをいただきました。

㉕不登校と進路(ゲスト3人+中村)

今以上に不登校に理解がなかった時代に育った2~30代のメンバー3人が登場、子ども時代に何を考えていたか、親との関わり、不登校の経験が今生かされているものといった話から、それぞれ主体性をもって人生を歩んでいることを実感しました。

㉖世界のフリースクール・日本のフリースクール(朝倉)

日本では情報の少ない海外のフリースクール事情ですが、シュレーはこれまで多くのフリースクールと交流をしてきており、英米・韓国など各国の背景と実践、そして日本各地のフリースクールの話をビデオや写真を交えて紹介しました。

㉗多様な学びが保障される社会に向けて(奥地・中村)

多様な学びが保障される社会の実現に向けて、シュレーが多くの方々を手を携えて目指して来ました。シュレーが従来から考えてきたこと、そして新法実現に手が届く状況まできている最新情報を交えて、参加者と意見交換しました。



㉘子どもの権利条約と子どもの学ぶ権利(喜多明人さん)

子どもの学ぶ権利行使としての「普通教育」の創造について、自己決定・安心して学ぶ居場所・多様な実践的な学び・自己生成/社会形成的な学びなどの原理を整理し、その上で大人の関わりや制度のあり方についてお話しをいただきました。

㉙脳科学者が考える教育の提言(茂木健一郎さん)

「個性に上下も満点もない、長所短所は表裏一体で個性とはそういうもの」「脳に無理させてはいけない。時期が来たら自然に動き出す」といった脳科学に基づいたお話しが1つ1つが、私たちが大切にしてきたことと重なって驚きを感じた講演でした。

㉚まとめ:不登校が拓く未来(奥地)

奥地が「子ども=いのち」「学校・制度・社会」「権利」のキーワードで29講座を振り返り、参加者から「市民としての学びが大事と感じた」「これで終わりはもったいない。不登校を本気で考えて動かさなきゃ」などそれぞれの気づき・学びをシェアしました。